

「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」の概要

1. 分析結果の概要

令和元年7～10月において、キャリア教育に関する実態を把握するとともに、それらに関する在校生の意識等も明らかにし、今後の各学校における今後のキャリア教育の改善・充実を図るための基礎資料を得ることを目的として、「キャリア教育に関する総合的研究」に関する調査を行った。

本研究の「第一次報告書」（令和2年3月）においては、主として各調査票に個別の設問への回答に焦点を絞り、それぞれの結果を整理して具体的に示した。本第二次報告書においては、個々の設問への回答のみからでは把握し得ないキャリア教育の実態を浮き彫りにすることを目的として取りまとめ、研究結果で明らかとなった児童生徒の意識の特徴や、今日のキャリア教育推進施策の中心的な課題に基づいて、主に次の3点のテーマから整理した。

2. 小学校、中学校、高等学校校種別分析

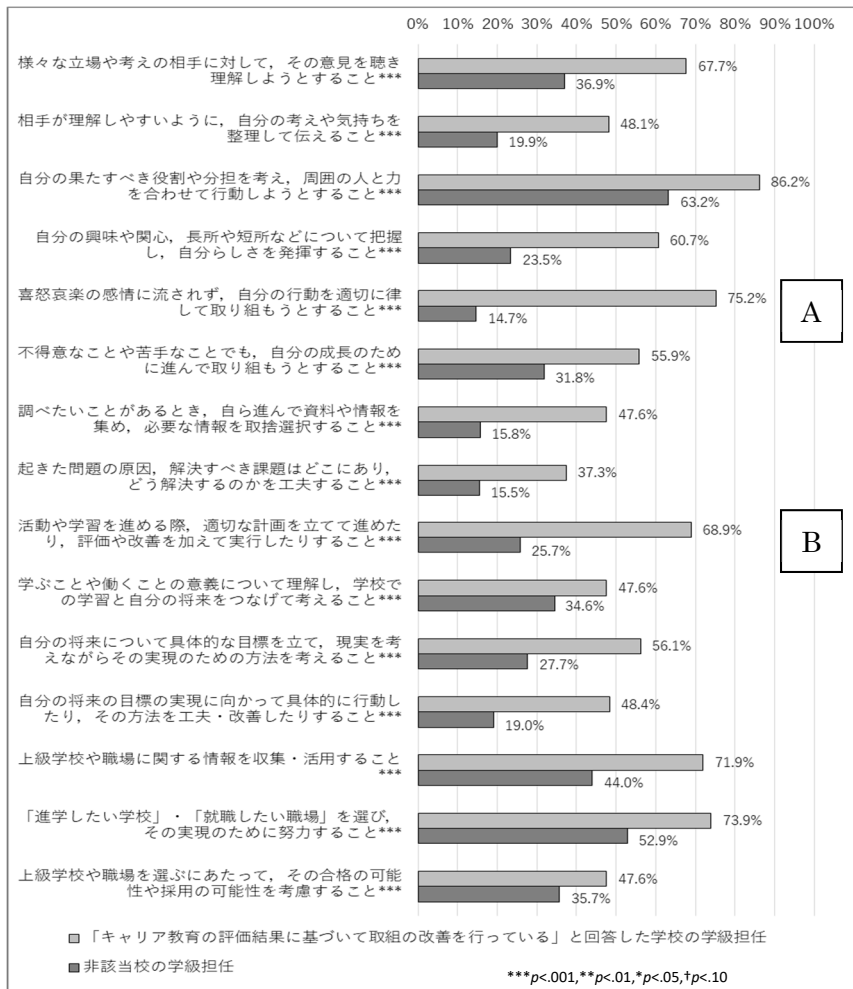
テーマ1 キャリア教育によるカリキュラム・マネジメントの効果

- 小学校においては、学校の全体目標を具体的に設定し、基礎的・汎用的能力との関係を示すことがカリキュラム・マネジメントの促進に影響していると考えられる。
- 中学校においては、カリキュラム・マネジメントの実現は、学級担任のキャリア教育の指導の充実や生徒の自己肯定感の醸成に影響していると考えられる。
- 高等学校においては、全体計画における「教科横断的、学年縦断的な取組」や「発達段階に応じたキャリア教育の実践」の重視は担任の指導の全般的促進に影響していると考えられる。

P60（中学校）キャリア教育の評価に基づく改善の実施有無（学級担任）別に見た、学級担任の基礎的・汎用的能力の指導状況（学級担任調査）

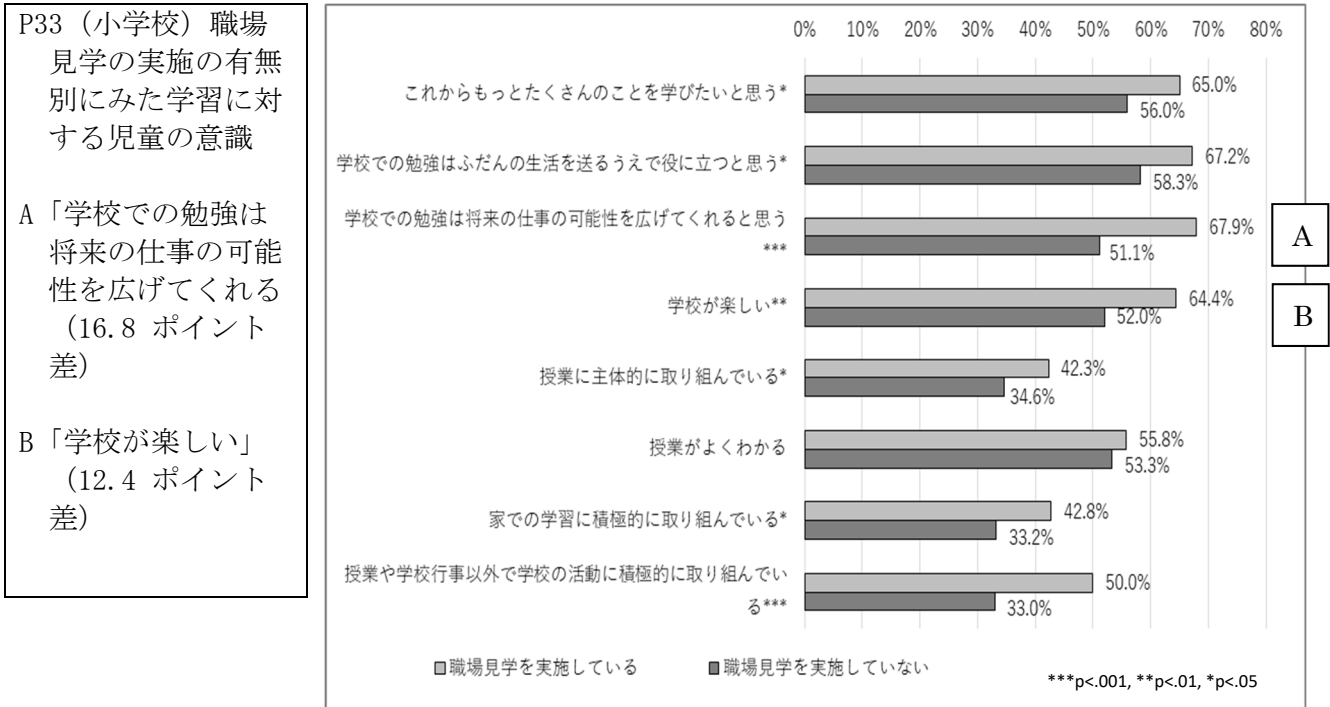
A 「喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとすること（60.5ポイント差）

B 「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」（43.2ポイント差）



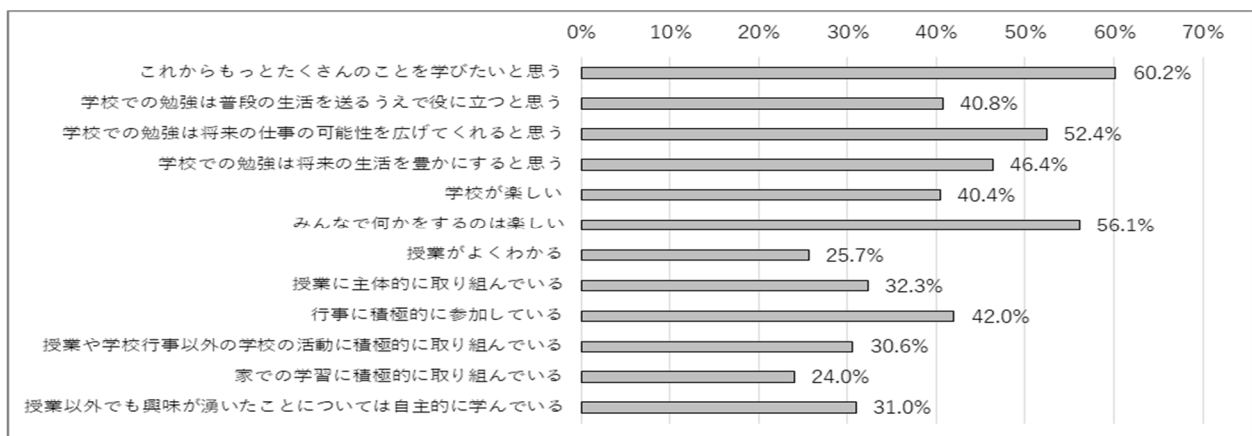
テーマ2 職業に関する体験活動の重要性

- 小学校においては、職業に関する体験活動の実施は児童の学習意欲の向上に影響していると考えられる。
- 中学校においては、生徒は職場体験活動に積極的に参加しており、大多数の生徒が職場体験活動を振り返って有意義と感じている。
- 高等学校においては、生徒は自分の個性や適性を考える学習や社会人・職業人としての常識やマナーの学習を期待し、職業体験活動（インターンシップ）に参加した大多数が有意義な活動だと感じている。



テーマ3 「キャリア・パスポート」の有用性

- 小学校においては、「キャリア・パスポート」の作成は、キャリア教育に期待される児童の学習意欲を高めることに影響していると考えられる。
- 中学校においては、「キャリア・パスポート」を作成している学校の学級担任は生徒のキャリア発達を意識した指導に取り組んでいる。
- 高等学校においては、ホームルーム担任が「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」ことが、生徒の「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「学びのレリバンス意識 (学ぶことについて将来とのつながりや意義等について考える意識)」に影響していることが考えられる。



P119（高等学校）担任が「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」クラスの生徒の学びに対する姿勢（担任調査，生徒調査）

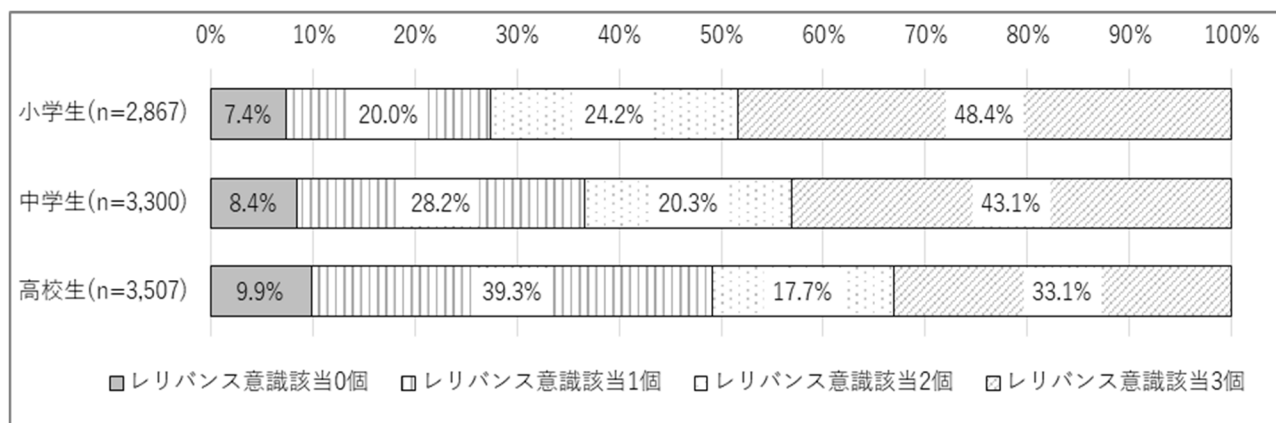
「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」クラスの生徒は「学習意欲」「学びのレリバンス意識」が高い傾向が見られる

3. 各学校種調査結果の比較分析

テーマ1 学校・教員の取組と児童生徒の「学びのレリバンス意識」

○各校種段階や学校の特性に応じたキャリア教育の実践が，児童生徒の「学びのレリバンス意識」に影響していると考えられる。

- ・小学校においては，キャリア教育に関する授業実践が実施されている学校や，将来について具体的な目標を立てることなどについて学級担任による働きかけがある学校の児童の「学びのレリバンス意識」が高い。
- ・中学校では，キャリア教育目標に基づき，体験活動に関する実践がなされている学校の生徒で「学びのレリバンス意識」が高いと考えられる。
- ・高等学校に関しては，学校の特性等の違いによりキャリア教育に関する取組状況が異なると考えられるため解釈が難しい部分もあるが，「学びのレリバンス意識」に関し，「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」や「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」が重要であることが示唆される結果が得られた。



P122（校種間比較）「学びのレリバンス意識」に関する項目についての児童生徒の肯定的な回答

テーマ2 学校・教員の取組と児童生徒の「課題対応能力」

○各学校段階に応じたキャリア教育の実践が，児童生徒の「課題対応能力」と関連を有すると考えられる。

- ・小学校においては，全体計画に「キャリア教育の全体目標」が盛り込まれること，「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」などの授業実践を行うこと，学級のキャリア教育の計画が児童のキャリア発達の課題に即して作成され，また，計画に基づいてキャリア教育を実施すること，児童に成長について振り返りをさせる学校の児童の「課題対応能力」が高い。
- ・中学校においては，全体計画に「キャリア教育の成果に関する評価方法」を盛り込むこと，「職場の訪問や見学，職業の調査・研究活動」「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」を実施すること，学級におけるキャリア教育で「キャリア・カウンセリングを実施している」こととこれに関連してキャリア・カウンセリングの中で生徒に自身の成長の振り返りを促すこと，加えて，「起きた問題の原因，解決すべき課題はどこにあり，どう解決するのかを工夫すること」「活動や学習を進める際，適切な計画を立てて進めたり，評価や改善を加えて実行したりすること」を学級担任が指導する学校の生徒で「課題対応能力」が高い。
- ・高等学校においては，全体計画に「キャリア教育の成果に関する評価方法」が盛り込まれていること，年間指導計画に「キャリア・カウンセリング」が盛り込まれていることが教員の指導を通じて生徒の「課題対応能力」の能力実感に作用している可能性がある。

令和3年10月第1版
令和5年1月第2版

「キャリア教育に関する総合的研究」について

1. 研究の目的

本研究は、キャリア教育に関する実態を把握するとともに、それらに関する在校生の意識等も明らかにし、今後の各学校におけるキャリア教育の改善・充実を図るための基礎資料を得ることを目的として、7年に1度、実施しているものである。

前回調査から7年が経過し、中央教育審議会答申においてもキャリア教育の重要性が繰り返し強調され、小学校、中学校及び高等学校の学習指導要領においては、特別活動を要に学校教育全体でキャリア教育の充実を図ることが明記された。こうした状況を踏まえ、各学校・地域の実態に応じた効果的なキャリア教育の推進・充実に資するため、令和元年度に、キャリア教育に関する総合的な調査、分析を行ったところである。

2. 調査の概要

- ・実施時期：令和元年7月～10月
- ・調査方法：各都道府県・政令指定都市ごとに対象とする学校数を決めたのち、各都道府県・政令指定都市が所管する公立小学校・中学校・高等学校の児童生徒数に基づく学校規模に比例するよう、国立教育政策研究所において、ランダムに抽出して調査を依頼した。なお、児童生徒調査については、上記で抽出した学校のうち、更に各都道府県・政令指定都市から2校ずつ、ランダムに抽出して調査を依頼した。
- ・調査の種類と回答数：

区 分	公立小学校		公立中学校		公立高等学校	
	回答数	回収率	回答数	回収率	回答数	回収率
学校調査	795校	79.5%	397校	79.4%	716校	71.6%
学級・ホームルーム 担任調査	1,562人	98.3%	1,379人	97.2%	4,066人	94.2%
児童生徒調査	2,908人	98.2%	3,426人	93.7%	3,606人	98.0%

※ 対象とする学校数は、全国で小学校1000校、中学校500校、高等学校1000校。

※ 学級・ホームルーム担任調査は、各学校の最高学年の担任全員が対象。児童生徒調査は、各学校の最高学年において児童生徒数が最も多い学級・ホームルームの児童生徒全員が対象。

※ 学校調査の回収率は、回答学校数を対象学校数で除して算出。学級・ホームルーム担任調査と児童生徒調査の回収率は、回答者数を回答頂いた学校に在籍する対象者数で除して算出している。